

推薦の言葉

これはわかりやすい、こんな企画があったのかと思ったのが本書をみた印象である。昔、皮膚病の治療はステロイドと抗菌薬と抗真菌薬の三種類を混合して、塗つていればたいていは治ると冗談ではいわれていたが、地域において本当にやっている先生に何度か出会ったのにはびっくりした。しかし、実際問題としてなかなかうまくはいかない。

まず、本書は設問の標題がシンプルでわかりやすい。パターンはすべて、日常、よくある事例である。しかも、クイズ形式の5者択一であるところが楽しい。薬剤名も商品名で記載されており、なじみがある。解答においても診断のパターン、治療のコツ、落とし穴と内容がコンパクトで理解しやすい。さらには、専門医への紹介のポイントなどもあり、かゆいところに手が届くというよりも、さらに一步進んで、かゆくなくても搔いてくれるような親切さもある。私もクイズを解いてみたが、油断しているとつい間違ってしまう。難易度も適切である。寝転がつても読めるがついついと引き込まれて、一気に読み進めてしまう面白さがある。

発疹は自然が作り上げた形と色からなる芸術品ともいえる。本書の著者は、発疹に対して独特の感性と才能のある人である。尋常性疣瘡を一発診断するのと、人の顔を誰と判断するのは同様の思考であるという、皮膚科診断学に暗黙知の理論を取り入れた草分けの学者である。パターン診断や治療についても利点と落とし穴を熟知している。本書を紐解いてみてそんなに沢山の症状のパターンがあつたのかとあらためて感心した。おそらく、著者の伝えたい事のエッセンスがここにつまっているのであろう。皮膚科に興味のある医師、皮膚科医に転向を希望する医師、皮膚科診療を余儀なくされている医師には、皮膚科診療が益々面白くなる本であることは間違いない。

皮膚科専門医にとって「自分たちの診療テリトリーが侵される」危険書かもしけないが、大局的に見れば多くの皮膚科専門医のさらなる向学心を高め、そして国民全体の皮膚科診療のレベルアップに貢献する名著である。少なくとも総合医、プライマリケア医、家庭医にとっては必携の一冊として推薦したい。

2013年9月

自治医科大学附属さいたま医療センター皮膚科
出光俊郎